

# 阿川弘之論

——戦争体験と戦争文学——

都 築 久 義

## (はじめに)

今年(平成十二年)の初め、明治書院から刊行された『新研究資料現代日本文学・第二巻』で阿川弘之を執筆した。これは二十余年前(昭和五十五年)の同書の補訂版であるが、この間に阿川弘之の作家活動や研究資料面で大きな状況の変化があったから、実質的には改めて書き直した。

今まで戦争と文学者について特に関心を持ってきたが、それは戦争下の文学や活動が中心であった。そこで今回の明治書院の原稿執筆を機に、戦後の戦争文学に眼を向け、阿川弘之の戦争体験と戦争文学に焦点をあてて、その特質について述べてみたいと思う。

## (一)

阿川弘之は昭和十五年四月、広島高等学校から東京帝国大学文学

部国文科に入学した。折から「支那事变」(十二年七月)は四年目になっても、解決の目途は立たず、政府は七月に南進政策を決め、東南アジアを植民地にしている西欧列強との直接対決で打開しようとした。

そこで大東亜共栄圏構想を打出し、「アジアを西洋の植民地から解放する」というスローガンを掲げ、昭和十六年十二月八日、米英に宣戦布告をした。大東亜戦争の開戦である。

日米決戦を国家総動員体制で臨もうとしていた政府は、これまでの大学や大学生に対する特別扱いをやめ、開戦前の十六年八月から大学にも、軍事教練担当の現役将校を配属し、十月には大学の修業年限の短縮(半年繰り上げ卒業)を決定した。やがて十八年十月、文科系学生の徴兵猶予制度を廃止し、二十歳に達した者は在学中でも徴兵されたのが、世にいう学徒出陣である。

阿川弘之は大東亜戦争開戦前後という総力戦の真っ只中に大学生

になったのだった。したがっていずれ軍隊に入るのは覚悟していたが、できれば陸軍より海軍に行きたいと考えていたという。その矢先、軍事教練で陸軍野営場から帰ってくると、文学部の掲示板に、「海軍予備学生（兵科）募集」ノ貼紙がしてあった。おりしも繰り上げ卒業で来年九月の卒業が知らされていた頃である。

「私の履歴書」（日本経済新聞 昭62・12・1〜31）でその時のことを次のように書いている。

もしかするとこれで、陸軍へ行かなくてすむ。どんな海軍教育と将来どんな配置が待っているのか、よく分からないけれど、その日私は迷ふことなく、予備学生採用試験を受けることを決心した。二カ月後大東亞戦争開戦、ハワイの米太平洋艦隊全滅、マレー沖の英戦艦「プリンス・オブ・ウェルス」撃沈と、相次ぐ緒戦の大戦果に、私の海軍願望がますます強くなった。

〔「断然欠席」講談社 昭64・6所収〕

海軍予備学生は大学や高等専門学校出身の予備士官で、短期の速成教育で士官になることができた。海軍では兵学校出身の士官と区別して予備学生と呼んだ。もともと飛行搭乗士官の補充を目的とした飛行科から始まったが、戦線の拡大で士官不足になり、一般兵科も募集し、阿川弘之はその二期制である。ちなみに陸軍は「支那事変」後に陸軍予備士官学校を各地に置いて充当した。

阿川弘之が繰り上げ卒業で、海軍に入隊したのは、昭和十七年九月三十日。同期の予備学生五百余人は、長崎県佐世保海兵団に集合し、台湾の東港航空隊へ向かった。台湾で半年間の基礎教育を受けた後、陸戦、対空、機雷、通信の専攻に別れ、彼は通信を選んだ。

台湾から帰ると、神奈川県横須賀の通信学校で暗号解読や通信諜報関係の技術を本格的に学び、十八年八月、少尉に任官し、海軍省の軍令部勤務を命ぜられた。軍令部では特務班に所属し、中国関係の通信傍受や暗号解読の作業に従事した。たまたま大学時代に国漢の免許をとろうとして、「支那語」を少しばかり勉強していたことが、中国関係の部署に配属された理由だったようだ。

軍令部に勤務して一年後の十九年八月、中尉に任官すると、「支那方面艦隊司令部附」の辞令が出て、漢口へ行くことになった。漢口は蒋介石政権のある重慶と対峙する位置にあり、要衝の地ではあったものの、今や主戦場は東南アジアの占領地域や太平洋上に移っていた。そのためこの地では激しい戦闘はなかった。

ここでは敵機の動静を探知したり、中国軍の動向を監視するのが阿川の主な任務だったが、日本がポツダム宣言を受諾して降伏するという情報もいち早く得ていた。それから半年後の二十一年一月三日、復員して広島に帰った。

広島への原子爆弾投下で安否が気づかわれた両親は無事で、再会をすませると、早々に上京した。海軍に入って断念した文学を、再び志したのである。久しぶりの東京は焦土と化していたが、上京す

ると、へきになつてゐた靖国神社へのお参りに行つた。別に信心のほうではないが、靖国神社へ参るだけは義務のやうな気がしてゐた。(略) 此処にはずるぶん大勢の友人たちがねむつてゐるのだ。(「靈三題」後出)。

東京に出て来て職さがしの末、とりあえず小さな新聞社に見習記者として採用され、手始めに書いたのがメーデーの記事だったが、へ書きあげてから読みかへした。さみしい気がした。(「修介」『別冊文芸春秋』6月号 昭23・4)のである。というのは、その原稿があまりにも、今や時代の風潮になつてゐたポツダム宣言の口真似だつたからである。

ポツダム宣言は、アメリカ、イギリス、中華民国が昭和二十年七月二十六日にベルリン郊外のポツダムで発した、日本への降伏勧告の共同宣言である。日本がこれを受託する詔書が発せられたのは八月十四日、翌十五日に玉音放送で国民に知らされたのは周知の通りである。

ポツダム宣言は十三項から成つてゐるが、核心は第六項である。

吾等は無責任なる軍国主義が世界より駆逐せらるゝに至る迄は平和、安全及正義の新秩序が生じ得ざることを主張するものなるを以て日本国民を欺瞞し之をして世界征服の挙に出ざるの過誤を犯さしめたる者の権力及び勢力は永久に除去せられざるべからず。

要するに、無責任な軍国主義者が国民を欺瞞し、世界征服を企てるといふ過誤を犯したので、彼らの権力や勢力を永久に介助する、と言つてゐるのだ。ポツダム宣言に従えば、日本国民は無責任な軍国主義者にだまされてゐたことになる。

しかし、大東亜戦争の宣戦布告は次のように言つてゐる。

米英兩國ハ残存政權(注・蒋介石)ヲ支援シテ東亞ノ禍乱ヲ助長シ平和ノ美名ニ匿レテ東洋制覇ノ非望ヲ逞ウセムトス剩ヘ与國ヲ誘ヒ帝國ノ周辺ニ於テ武備ヲ増強シテ我ニ挑戦シ更ニ帝國ノ平和的通商ニ有ラユル妨害ヲ与ヘ遂ニ經濟斷交ヲ敢ヘテシ帝國ノ生存ニ重大ナル脅威ヲ如ク(略)速ニ禍根ヲ疫除シテ東亞永遠ノ平和ヲ確立シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス。

開戦当時、多くの人びとは米英の(「東洋制覇」と戦うことに拍手を送り、緒戦の成果に歓喜したはずだ。ポツダム宣言の言うような無責任な軍国主義者の(「世界征服」にだまされてゐる、と思つてゐた国民などはいたのだからか。

ところが、戦争に負けた途端に、人びとは占領軍の言うままに、軍人や軍隊を罵倒し始めた。植民地解放の「聖戦」が一夜にして世界征服の「侵略戦争」になり、「鬼畜米英」が一朝にして「民主主

義の理想国家」になってしまったのである。

こうした人びとの変り身と時代の動向に阿川弘之は追従しなかつたため、へあいつ一人、向ふ側の人間だから「私の履歴書」といった批判があったという。たしかに、靖国神社に参拝したり、ポツダム宣言に懐疑的であつてはへ向ふ側の人だった。逆にいえば、時代が激変しても自分の信念と節操を守つた人でもあつたのである。

## (二)

阿川弘之がはつきりと文学の道を志したのは、旧制高校に入つてからである。昭和十二年四月、広島高等師範学校附属中学校を四年で修了し、広島高等学校文科乙類に入學した。その年の七月に「支那事変」が勃発し、時代は戦争に向かつていたが、附属中学の自由主義的な校風の中で育つたせいもあつて、時代の雰囲気にあまり染まることもなかつた。経済的にも恵まれた家庭生活を送り、学校では芸部で活動していた。

高校時代に阿川が最も文学的影響を受けたのは、中島光風先生と志賀直哉であつたことを随所で述べている。中島光風先生は高校時代の恩師だ。一年生の時に万葉集の講義を聴いて魅せられ、課外授業の万葉集輪読会や短歌会にも出席し、先生のお宅にも押しかけたという。阿川は中島先生と万葉集によつて文学的開眼をしたのである。

志賀直哉は高校時代に影響を受けたばかりか、大学時代には卒業

論文に書くほど私淑していた。その志賀によつて作家への道が開かれ、門弟に名を連ねたのは有名だが、そもそも志賀直哉との出会いが興味深い。

「わが文学の揺籃期——戦争前後の頃」で次のように告白している。

同じ年（昭和十二年）の秋、岩波書店から「二葉亭四迷全集」が、改造社から「志賀直哉全集」が発行されることとなつた。

新聞広告を見て私が取つてほしいと言ふと、どちらか一方だけならよからうと父親が答へた。私はしばらく迷つてゐた。こんにちのやうにたいいてい中等国語の教科書に志賀先生の作品が載つてゐるやうなことはなく、私は二葉亭四迷は読んでゐたが、「シガナオヤ」はどの程度しつてゐたかゝるなかつたか、ただ文芸部の先輩が、「シガナオヤのアンヤコロが今度完結したがあれはすばらしい小説だ。」と言つたのが耳に残つてゐて、結局志賀直哉全集を買ふことに決めた。

（新潮日本文学51 阿川弘之集 昭45・12 月報）

阿川は高校時代にもう一人、特記すべき人にめぐり会つてゐる。谷川徹三だ。文芸部の講演会で講師に招いたのが機縁で、東大に入學後も、谷川家に入入りし、家族とも親しい間柄になつた。谷川が後に阿川を志賀直哉に引き合わせてくれたことを想起すると運命的

な出会いだった。

高校時代の創作活動は、兄や姉の居た満州へ旅行した折に見た、白系ロシア人のバスガイドと日本の青年との恋愛を描いた、「白き花」を文芸部誌『皆実』に発表したのが処女作だ（『私の履歴書』）そうだが、わたしは未見である。ただし、『皆実』に発表した作品は、『包子』（24号 昭13・9）、「瀬戸」（25号 昭14・2）、「季節風」（26号 昭14・6）の三篇が、『阿川弘之自選作品X』（新潮社 昭53・6）に収録されている。満州、大山スキー場、沖繩などが点描された体験記風の短篇だが、高校時代の生活環境が彷彿としている。

高校時代の終わり頃から学外の同人誌『こをろ』にも参加している。昭和十四年十月、福岡周辺の高校生や大学生によって福岡で発行された雑誌だ。幼なじみが福岡高校に在学していて、彼から誘われて参加したが、  
へこの雑誌は、三年後海軍に入るまで、私がものを書いて行く上での拠りどころ（『私の履歴書』）だった。同人には、島尾敏雄もいて、作家になってからの文学的立場は違ったが、島尾は阿川の最もよき理解者であった。

『こをろ』に発表した作品も、『阿川弘之自選作品X』（前出）に、『大和路』（1号 昭14・10）、「こをろ」について（5号 昭15・5）、「三月」（6号 昭16・3）、「盛親僧都伝」（10号 昭17・3）の四篇が載っている。『こをろ』に発表された作品は古典風で、万

葉集の雰囲気漂っている。

『皆実』や『こをろ』を見る限り、戦時下ながら際立った戦時色はみられず、むしろマルクス主義の影響も全く感じられない。マルクス主義の洗礼という点では、彼は遅れて来た青年だったのである。革命思想の余波さえも受けず、もっぱら志賀直哉の人と文学に傾倒して、阿川文学の土壌と基盤を形成して行ったのである。

海軍時代の三年間は、当然のことながら文学活動は中断するが、復員してまっさきに谷川徹三の家に挨拶に行き、今後のことを相談すると、へ僕が推薦してもいいと思ふやうなものを書いて持つて来たらどんな所へでも推薦してあげますよ。何か書きませんか。今は新しい若い人が出る時ですよ（『巢立ち』、『座右宝』昭21・6）と言われ、ペンを執り始めた。

そこで、広島原爆で無事だった両親に再会した歓びを描いた短篇（『年年歳歳』）を谷川に渡すと、谷川はそれを志賀直哉にもみせた。志賀直哉が、もう二、三作書くようにと言っていたと伝え聞いて、最近の身辺雑記をまとめ（『霊三題』）、谷川徹三の紹介状を持つて初めて志賀直哉を自宅に訪ねた。

こうして当代随一の大家に邂逅し、いち早く文壇登場の切符を手にしたのである。実際、志賀直哉の後盾と推薦は絶大の威力を發揮し、はやくも昭和二十一年九月号の雑誌に、『年年歳歳』（『世界』）と『霊三題』（『新潮』）が載った。それも『世界』は岩波書店が新たに創刊（昭21・1）した総合誌で、『新潮』は老舗の文芸誌とい

う、無名の新人の処女作を発表できる雑誌ではない。

このような破格の文壇デビューをしたが、文壇は彼の文学を容易に受け入れる状況にはなかった。昭和二十一年九月の文芸時評で、平野謙は次のように書いている。

新日本文学会のまわりに、この「病舎にて」や「町工場」のやうな質僕な作品が花さいてゆくことはいかにも会自体の成功だろう。この二作を大向日葵の「マッコイ病院」(新潮・九月)や阿川弘之の「霊三題」などのむなししい平明に比較した場合、新日本文学会の会としての弾みはいっそう明らかとなる。

(『文芸時評』昭44・8 河出書房新社)

文芸時評でこんなふうに酷評される阿川に原稿の注文はなく、彼の方にも書く意欲があまりなかったために、彼への非難の中には、

「若いのに野心がなさすぎる」といふのもあつたが、今の文壇で野心なぞ持てば、心かななはぬ芸当の一つもして見せなくてはならなくなるだらう。真ッ平ごめんと……

(『私の履歴書』)

意地を張っていたのは、いかにも阿川弘之の面目が躍如していよう。反戦・反軍を標榜し、民主主義文学の創造を詠う新日本文学会

(二十年十二月創立)が、文壇の旗手として大手を振っていても、あくまでも自分の文学と姿勢を崩さなかつたのである。

### (三)

阿川弘之が初めて書いた本格的な戦争文学は、「あ号作戦前後——春の城」である。昭和二十四年十一月号「新潮」に発表され、目次にわざわざ「二百枚」と記された大作だ。「あ号作戦」は、昭和十九年六月、太平洋マリアナ海で展開された海戦で、艦隊司令部のあつたサイパン島が全滅し、日本の敗戦を決定的にした。サイパン島の玉碎は島民も巻添えにし、その悲劇は語り草となっていた。そのため小説の題名から「あ号作戦」を題材にしていると思いがちだが、小説の舞台はマリアナ海でもサイパン島でもない。東京は霞ヶ関の海軍省軍令部である。実はこの小説には「後記」で、「あ号作戦前後」は、長篇小説「春の城」の一部であり、「あ号作戦前後」は今回の部分の副題である事をお断りしておく。」と付記してある。ついながら「春の城」は杜甫の詩が念頭にあつてつけたという。

この小説は、一言でいうと、「あ号作戦」前後の、海軍省軍令部特務班の軍務と人間模様を描いた作品である。ここは阿川弘之が予備学生から少尉に任官し、最初に配属された部署だ。小説の「まえがき」には、特務班の業務、構成、人数が詳しく説明してあり、当時の戦争文学としては異色といえよう。主人公は予備学生出身の士

官、小畑耕二、作者がモデルで特務班には大学の同級生や同窓生で予備学生出身の仲間が数人いる。

敵軍の飛ばす暗号解読の方法が詳述されていたり、刻々と入って来る戦況や仲間の一人が戦死した「あ号作戦」の戦闘描写などが、戦争文学の雰囲気をかもし出している。しかし、主題は予備学生仲間の友情と淡い恋であり、若い士官たちの青春だ。

『群像』（昭25・1）の創作合評会（尾崎一雄、亀井勝一郎、佐々木基一）で、「あ号作戦前後」をとりあげ、尾崎一雄が「この小説はちよつと「三四郎」みたいな気分がありませんか」と発言しているのが、この小説の主題を的確に伝えている。若い士官たちが理事生と呼ばれた女性タイピストに恋をすれば、仲間同士で友情を示し、勤務が終れば帝劇にも行き、構内の庭でクロケットに興じ、正月には帰省もするといった光景は、砲弾煙雨の戦場では決して見られない。

「あ号作戦前後」は、小畑耕二が「支那方面艦隊司令部」行きを命ぜられ、中国の漢口へ向うところで終っている。この続きは「四つの数字」（『別冊文芸春秋』22号 昭26・7）と、「管弦祭」（『新潮』昭26・12）に書き継がれ、三篇をまとめて、『春の城』と題し、昭和二十七年七月に新潮社から刊行された。ただし、単行本はかなり書き加えたり書き改められている。

『春の城』は四章で構成されていて、第一章は主人公小畑耕二の東大文学部時代。「あ号作戦前後」以前の話で、単行本で新たに書

き加えられた。故郷の広島にいる、伊吹智恵子との熱く純粋な恋も語られ、この小説のもう一本の柱となっていて、戦争文学の中に青春小説の彩を添えている。

むろん、第一章の基調は、彼は此の戦になら、本当に命が投げ出せさうな気がしだした。それが自分達若者の光榮ある義務だという風に彼は思った」と言うくだりだ。小田切秀雄が『近代日本の学生像』（青木書店 昭30・11）で言うように、それは「戦争下の学生の平均的な思想と運命」であった。

第二章は、「あ号作戦前後」の内容がほぼそのまま、第三章は漢口の艦隊司令部の様子だが、この地で知った原子爆弾の投下にかため、恩師と恋人が亡くなった状況を詳しく描写している。第四章の時代は昭和二十二年八月、厳島神社の管弦祭の日。広島駅前のアーチに、「祝平和祭」と書かれた文字を見ながら、自分たちが戦争中して来た努力は、何も彼も不正な誤りであったのか？本当に憎んでもよいものがあるとしたら、それは何なのか？と思った。それは阿川弘之が問いつづけたテーマであり、彼の戦争文学の原点である。

「あ号作戦前後」（第二十二回）も、「管弦祭」（第二十六回）も芥川賞候補になりながら受賞はしなかったが、『春の城』は第四回（昭和二十七年度）読売文学賞小説賞を受賞して、名実ともに文壇の中央に進出することができた。思えば昭和二十七年の四月に、講和条約が発効して、占領軍管理の時代が終り、五月二日には戦後初めて、全国戦没者追悼式が行われ、ポツダム宣言の呪縛から解放さ

れた年である。

『春の城』は読売文学賞受賞ということで選者の一人、広津和郎はへ戦後の作家の多くが複雑な現実との対決で否定的になったり、皮肉になったり、絶望的になったりして、いわゆる戦後の歪曲を見せているのに換え、めずらしく素直でのびのびして明るいのが特徴である（読売新聞 昭28・1・1）と評している。

そのことも事実だが、むしろ島尾敏雄の次の指摘と評価が最も正鵠を射ていると思う。昭和二十七年十月号『現在』に寄稿した書評の一節である。

主人公の周囲だけが疑いもなく青春であったという物語が展開され、読者はやはりその瑞々しさに一種の羨望のような感じはするが、あまりにも青春だ！と肩をすばめなくなる面を持ってゐる。暗い青春の方に眼を向ける者に対する、するどい語りかけの要素はない。

我々は表現過剰の小説をあまりに若い周囲に持ちすぎていることに對して、阿川は一つの中道の道を敢然と示して呉れたという功績は認めよう。戦争小説は兵卒の位置から真向かぶつて否定的に描かねばならぬと言ふ呪文を先ず阿川が破ることの一つの例を示して呉れた。

（『島尾敏雄全集第13巻』晶文社 昭57・5所収）

戦後の新人たちの戦争文学といえば、梅崎春生の「桜島」(21・9)や「日の果て」(22・9)、大岡昇平の「俘虜記」(22・2)や「野火」(23・12)、野間宏の「崩壊感覚」(23・1)や「真空地帯」(27・2)などが思い起こされるが、観念やイデオロギーが先行し、激越な言葉や深刻ぶった、まさに過剰な表現が目につく、主役は下級兵士。軍隊の非人間性や腐敗を告発することが主題であり、敵を撃つことに悩むヒューマニズムが描かれている。

ところが『春の城』の登場人物は兵卒ではなく、いずれも士官だ。舞台も前線の戦場や軍隊ではない。予備学生出身のインテリ将校の中には、多少の疑問や疑念を持つ者がいたとしても、へ真向かぶつて否定的に戦争を見ている者はいない、戦争を思想や善悪ではなく、国家や勝負の視点で見ている。

そもそも、軍隊には兵卒もおれば将校もいる。身分や立場がちがえば、戦争への参加の仕方や考え方もちがう。にもかかわらず、戦後の戦争文学はへ兵卒の文学だけだった。そこへ初めて将校の文学が現れ、戦争文学は反戦、反軍で書かねばならぬというへ呪文を破ったのである。阿川は戦争文学を反戦・反軍の視点や立場で書かなかった最初の戦後派作家であった。

『春の城』が阿川の出世作だとすれば、代表作は「雲の墓標」である。この作品は昭和三十年一月から十二月まで、「新潮」に連載され、翌三十一年四月、新潮社から刊行された。学徒出陣で徴兵されて海軍に入り、予備学生として、飛行科を志願して特攻隊員にな

り、若くして生涯を閉じた青年を主人公にした日記形式の小説である。

この小説が現れる前にも、特攻隊員や戦没学生の手記・遺稿集は数多く世に出ていたが、昭和二十四年十月、日本戦没学生手記編集委員会が東大共同組合出版部から刊行した『きけわだつみの声』が最も有名だった。「あとがき」には全国から三百九人の寄稿があり、七十五人を選んで収録し、「真実を見る目をふさがれ、虐げられ、酷使され、そして殺されていった若いすぐれた人々の痛切な訴え」が満ち満ちていると記してある。

しかし、「序文」には「へかなり過激な日本精神主義的な、ある時には戦争謳歌にも近いやうな」ものは載せていないと述べ、その理由を執筆者で東大教授の渡辺一夫は次のように説明している。

若い戦没学徒の何人かに、一時でも過激な日本主義的なことや戦争謳歌に近いことを書き綴らせるにいたつた酷薄な条件とは、あの極めて愚劣な戦争と、あの極めて残忍黒い国家組織と軍隊組織とその主要構成員とであつたことを思ひ、これらの痛ましい若干の記録は、追ひつめられ、狂乱せしめられた若い魂の叫び声に外ならぬと考へた。(略)若い学徒を煽てあげてゐた人々が、現に平気で平和を享受してゐることを思ふ時、純真なるがままに、煽動の犠牲になり、しかも今は、白骨となつてゐる学徒諸氏の切ない痛ましすぎる声は、しばらく伏せたはうが

よいと思つたしだいだ。

『きけわだつみの声』に反発して、第十三期海軍飛行専修予備学生の遺族同期生の会「白鷗遺族会」が刊行したのが「雲ながるる果てに」である。「初版が刊行されたのは昭和二十七年夏、(略)当時の偏向的な風潮に対して、やむにやまれぬ思いがあつた」(増補版 河出書房新社 平7・6)からだ。

『雲ながるる果てに』の「発刊の言葉」は次のように言っている。

戦後、戦没学生の手記として『きけわだつみの声』が刊行され、そしてそれが当時の日本の青年の気持の全部であつたかのような感じで迎えられ、多大の反響を呼んだのであります。確かにあつた気持の者も、数多い中にはさうとうおつたことと思ひます。

しかしながら、それが一つの時代の風潮におもねるがごとき一面からのみの戦争観、人生観のみを描き、そしてまた思想的に或いは政治的に利用されたかの風聞を聞くにおよんでは、「必死」の境地に肉親を失われた遺家族の方々にとっては、同題名の映画の場合と同様に、あまりにも悲惨なそののみを真実とするには、あまりにも呪われた気持の中に放りだされたのではなにかと思ひます。(略)当時の散華していかれた方々の気持はもつと淡々とした、もつと清純なものであつたことを信じて、

これを世に訴えるべきだと思つたのであります。

この本が占領から解放された直後に刊行されたのは興味深いが、遺稿集に収録されているのはいずれも、手紙、遺書、覚書、日記の一部といった大勢の戦没学生の短文である。それゆえ、彼らの心理や行動の断片は垣間見ることではできても、心理や行動の全体像は十分には伝わってこない。そうした遺稿集の限界を越えるために一人に焦点をしぼり、特攻隊戦没学生の内面に深く立ち入って描いたのが「雲の墓標」である。おそらく特攻隊戦没学徒をこれほど詳しく扱つた文学作品は初めてであろう。

主人公は京都大学文学部国文科に在学のまま徴兵され、同級生四人と一緒に海軍に入った学徒出陣の吉野次郎。日記は入隊して二日後の昭和十八年十二月十二日から始まり、吉野に特攻出撃命令がくだつた二十年六月十九日で終わつている。この小説はこの間の九十余日分の克明な日記の他に、友人の手紙や本人の遺書などで構成されている。

日記を追つて行くと、この間の主人公たちの動向や特攻隊の実態などがよくわかるが、この小説の主題は「定められた運命の下」で、どのようにして、「自分を鍛える」ことができたのか、鍛えて行つたのかという、心理の道程にあることはいうまでもない。

吉野次郎は日記の冒頭で次のように書いています。

のこしてきた学業への未練、父母への思慕、多くのなつかしい人々への気持、それが十重二十重に自分からみつき、自分も幾つにも引き裂くのである。しかし、自分たちにはもはや、なにかを選ぶといふことは出来ない。定められた運命の下に、自分を鍛へることだけが、われわれに残された道だ。

(十八年十二月十二日)

「雲の墓標」は、むろん阿川弘之の体験ではない。旧友から渡された実在の日記をもとに書いた作品である。作者がこの日記にどの程度の創作を加えたかはともかく、朝日新聞(昭31・5・13)の書評もいのように「この小説のモデルになつたと思われる青年の日記も非常に良質のものだ」。それは「大学の国文科を中退した若い知識人として、その内面生活も外面生活も節度を保ち、しかも、固苦しい形式主義にわずらわされず、ある程度自由に軍隊の生活を見てゐる」からである。

この戦没学徒の日記を読めば、「きけわたつみの声」の編集の意図や思惑が、いかにも空疎なことか歴然としてくる。遺族や同期生ならずとも反感を覚えるのは当然だろう。もとより阿川弘之もその一人であつたから、この青年とその仲間たちに共感し、万感の思いを込めて「雲の墓標」を執筆したのである。

実は「雲の墓標」のモデルは第十四期海軍飛行予備学生であるが、彼らの遺稿集『ああ同期の桜』も小説が世に出て十年後の昭和四十

一年に刊行（毎日新聞社）され、阿川弘之も『サンデー毎日』（昭和41・10）にさっそく感想を寄せている。

彼らに必死の戦法を強制した者への不満と、彼らの死の価値の評価とは、自ずから別のものではあらねばなるまい。特攻隊員たちの中には、追いつめられて覚悟を定めながらも、自分たちの死が所詮は犬死に終わるのではないかと憂えていた者が幾人もいた。また戦後、いわゆる進歩派の学者や評論家の中に、同じことをいった者がたくさんいた。だが、特攻機で出て行く者が犬死を心配するのと、進歩派の学者が安全地帯に出てから「お前たちは犬死だった」というのとは話がまるでちがう。彼らの死が犬死であったとは、私には思えない。私があの一握りの人々の書くものを一切信用せず、唾棄したい気持を持ちつつづけている大きな原因の一つはそこにある。耐えうべからずものに耐えて、彼らはよく戦ってくれた。

（『私のなかの海軍予備学生』昭和出版 昭46・2所収）

阿川弘之がたまたま手にした特攻隊戦没学徒の日記を一読して、「雲の墓標」を書こうとした動機、いや使命感がこの一文の中に明瞭に述べられているよう。

阿川弘之は、『春の城』と『雲の墓標』の二つの長編を書きあげると、まるで使命を終えたかのように戦争文学を発表しなかった。

しかし、それから十年近く経って、昭和三十九年八月十七日付の読売新聞で「今後、戦争文学を書くとするば、將軍から一兵卒まで、大勢の人間が、それぞれ自分の生活を背負うて活躍する大きな歴史絵巻のようなものが書いてみたい」と言い、「史伝山本五十六」（『文芸朝日』昭39・10）40・9）を書き始めた。

「史伝 山本五十六」の後、「回想米内光政」（『週間読売』昭52・7）53・8）、「井上成美」（『新潮』昭58・5）61・3）と書き継いで、二十余年をかけて海軍提督三部の評伝をまとめた。この間、阿川弘之が属した海軍予備学生同期生の群像を「暗い波濤」（『新潮』昭43・8）48・6）に活写し、海軍の巨大船艦「軍艦長門の生涯」（サンケイ新聞 昭47・8）50・2）を追って、大東亜戦争の（歴史絵巻）を書きあげたのである。

阿川弘之は、時代が余儀なくさせたとはいえ、志願して海軍に入り、予備学生から士官になったが、過酷な軍隊生活や苛烈な戦場生活は送っていない。といっても、それは必ずしも彼が選択したわけではない。国家総動員体制で戦った大東亜戦争下では、若者はすべて自分の運命を選択できなかったのである。

したがって彼はいつも紙一重のところで命永らえてきたのである。そしてそのことを素直にありがたく感じ、自ら生きた青春を正直に語る生き残り残った者の使命であり、亡くなった者への義務だと信じてきた。その使命感や義務感が、若くして逝った大勢の友や同世代の仲間を裏切るようなことはせず、自らの立場と姿勢を一貫し

て守らせたのである。

彼は兵学校出身ではなく、予備学生出身ではあったが、将校の矜持を捨てなかつた作家である。それは戦後の作家の中では経歴もさることながら、生き方としても際立った存在であった。